信長の夢

椎　名　利（化工会）

一五世紀、エンリケ航海王子に率いられ大航海時代の幕を開け、世界に覇を唱えたポルトガルの首都リスボンの中世の姿を留める街並みは、紫のジャカランタの花で染められていた。

バスは海のように広いデージョ川に架かる全長一八キロと称するヴァスコ・ダ・ガマ橋を渡ると、コルクの木の林を右手に見ながらエヴォラへの道をたどっていた。

やがて、最初に高速道路にETCを設置したのはポルトガルだとか、コルクの産出量は世界一だと雑談的な話をしていたガイドが、エヴォラにイエズス会の学校であること、また日本の天正少年使節団が約五〇〇年前に訪れた歴史を語りだした。

J大史学科を卒業し、リスボン大学の留学生だと紹介された彼女の説明は当を得たもので、歴史を語る彼女に言い知れぬ情熱を感じた。

プロローグ

宗教革命の荒波にさらされる中、カトリック教会の自己再生をめざし、一五三四年八月一五日パリ大学の若き学徒七名がモンマルトルの教会で、新しい修道会を結成し、『イエズス会』と名乗った。初代の総長になったのはスペインの騎士イグナチウス・デ・ロヨラでこの会員の中に、フランシスコ・ザビエルもいた。

当時すでに『フランシスコ会』『ドミニコ会』『聖アウグスチヌス』などの修道会がヨーロッパでその活動を開始していて、新規の修道会『イエズス会』はインド、アジアなどヨーロッパから離れた地域の布教にあたらざるを得なかった。

もともと、ポルトガルは農産物の生産には適してなく、勢い海外活動に目を向けざるを得なかった。このような状況をよく理解し、学者や冒険家を育てたのはエンリケ王子だった。彼はアフリカ西海岸に数回にわたり探検隊を送りこみ、バーソルミュー・ディアスが最南端の喜望峰に達し、（一四八八年）ヴァスコ・ダ・ガマのインド航路発見（一四九八年）に至る先駆的役割を果たした。

時あたかも、スペインは大西洋側をアメリカ大陸に、ポルトガルはこのインド航路発見によりインド・アジアを植民地支配する国家として発展することになる。

このため、ポルトガルはインドのゴアに総督府を置き、東洋の香料、織物を独占しその勢力は一六世紀半ばにはマカオにも及んだ。

新興のイエズス会は遠く離れたインド・アジア地区の布教を目指すものの、自ら船団を組み宣教師を送り込み、その生活物資の調達などをするには組織が脆弱過ぎた。

そこでイエズス会は、インド、アジア地区を勢力下に収めているポルトガルに接近した。

ポルトガルも植民地経営に宗教みを加味することで、『霊魂の救済と安寧』という、正当性を得るため

ここに『聖と俗』の提携が実現した。

　これによりポルトガル国王から経済的援助を受けられたが、イエズス会の広範囲の活動を維持するにはあまりにも少なかった。そのため、自らも貿易など経済活動に手を染め、これが聖の世俗化する矛盾を含むものの、『神の言葉を蒔く』方策として容認せざるを得なかった。

　このようなアジアへの布教活動を日本にもたらしたのは、フランシスコ・ザビエルだった。

　一五四七年、彼はマラッカで不思議な日本人に会った。鹿児島出身のヤジローと称するこの男は、些細なことから殺人を犯し逃亡していた武士だが、初めからポルトガル語でザビエルと応答した。

　ザビエルは、この男の中に従来接してきたインドや他の東洋人とは、比較にならない教養・知性・節度ある態度を認めると、すでに文化的土壌を持つ日本への布教が効果的と思えた。

　ゴアに戻り準備を整えたザビエルは同僚のトルレス――後の日本教布長――とヤジローを伴い、一五四九年八月一五日鹿児島に上陸した。

　ここから、日本におけるキリスト教の布教は始まった。

　ここでガイドは話を中断すると皆に問いかけた。

「皆さん、天正少年使節団はご存知ですね」

　私は、歴史の教科書の脚注にわずかに記されていた四人の少年を思い出していた。

「彼達はわずか一三、四歳で日本を立ち二年六カ月かって――往復には八年六か月かかった――リスボンに到着しました。極東からのこの少年たちは、感嘆の目で迎えられ日本の風習など知らしめ、各地で大歓迎されたのです。彼らの日本での記録は、禁教のためでしょうか少ないのですが、ヨーロッパでは当時でさえ彼達の様子を書いた印刷物が四十点近くあったことでも、外国での関心の高さがわかります。この偉業を成し遂げた四人、伊東マンショ、千々石ミゲル、中浦ジュリアン、原マルチノはあのバチカン宮殿やミケランジェロの天井画などをどんな目で見たのでしょうか？勿論現在のようにだい円形の列柱のファザードなどはなく、大聖堂も現在のような状態ではなかったわけですが」

　私も初めてサン・ピエトロ大聖堂を見た時、その威圧的とも思われるドーム状の聖堂の圧倒的な量感に、眩暈するようなカルチャー・ショックをうけたのを思い出していた。

「この四人は禁教の日本でマンショは病死しますが、ジュリアンは殉教を、マルチノはマカオへ追放されるのですが、ミゲルは棄教します。」

　エヴォラの街は、城壁に囲まれ中央が高台になっていた。緩い坂道を上がるとその頂上付近にエヴォラ大聖堂があった。

　二つの非対称の尖塔に飾られたメイン・ファサードの入り口は、一二使徒の像で飾られている。

　礼拝堂は、典型的なゴシック様式の十字型教会で、アーチ型の巨大なトンネルの内部を左右のバラ窓からの光が照らし、祭壇中央には豪華なシャンデリアがつるされていた。入口付近の一段と高いところに作られた聖歌隊席にはパイプオルガンがあった。そのパイプオルガンを指したガイドは、

「このオルガンを、伊東マンショと千々石ミゲルが演奏したと言われています。その演奏の技量の高さに皆驚き、感嘆の拍手を送ったそうです」

斜めにさす光を受け輝くパイプオルガンを私はじっと眺めた。

昼食時、ガイドの女性に、「少年使節団の何を研究テーマにしているのか」と訊ねると、

「わたしは、天正少年使節団をキリスト教の布教から離れて、彼達が成した文化交流の功績を評価したいと考えているのです。例えば、信長はローマへの献上品として安土城の屏風を持たせていること、また、彼達が実際に着ていった武士の装束・刀などから日本の風俗などを具体的にヨーロッパ人に伝えたのはもっともっと評価されるべきだと思っています。一三世紀にマルコポーロが『東方見聞録』で、ジパングとして日本を紹介しているのですが、これは伝聞を記したもので日本を真に世界史に登場させた功績は彼らではないでしょうか。その評価さるべき彼らが全て不幸な結果に終わっているのがたまらなく不憫に感じるのです」

帰国後、彼女の言葉に興味を持った私は、『あの戦国時代に誰がこのような使節団を企画したのか？なんのために……』との疑問に捉われ、企画者の一人で日本初のキリシタン大名、大村純忠を調べ始めた。

大村純忠

一五三三年、有馬晴純の次男として生れた純忠は、大村純前の養子となったことに生涯重荷を背負うことになる。

戦国時代の当時、次男が他家の養子になることは格別不思議ではなかったが、大村家には純前の庶子貴明があり、彼を後藤家に養子に出し純忠を迎えた不自然さが、後々まで尾を引くことになった。

元来、大村家の当主の正室は、有馬家から迎えるのを習わしとし、姻戚関係を元に宗主権を持つ有馬家にとって側室の子――下賤の出、中国人ともされている――である貴明の家督相続には反対だった。

その上、家臣団にも有馬家出身の純忠の相続がある意味で自然と解釈するものもいた。

しかし、歓迎するものがいる一方有馬家の制圧と映り反発するものも多く、貴明に主従して後藤家に去るものもいた。さらにこれに同調する大村親族衆も多く、純忠の家督相続当時の地位を不安定にした。

当時、肥前で最大の勢力を誇っていたのは竜造寺隆信で、一度仏門に投じたがのち還俗し一門の中心となり、周囲の計略を進めていた。その性格は残忍性を帯び、彼の人柄について『イエズス会年報』は次のように綴っている。

> きりしたん協会の最大の敵であり、はなはだ残忍性を帯びた君子で、キリスト教の迫害者として隣国人に恐れられている。

次にあげられるのは平戸の松浦隆信・鎮信父子で、隆信の手腕と共に平戸における南蛮貿易を基盤とした経済力にささえられていた。

さらに、後藤家の養子となった後藤貴明は、大村家の反純忠と気脈を通じ、しばしば純忠の領内に侵入する機会をうかがっていた。

一方大村家の知行地は二万一千石と言われているが、一族親族が知行する村々が上位一〇家のものだけでも七、六六〇石に及び純忠の直轄領は僅か四、二〇〇石にすぎなかった。

これは庶子が多く、これらに所領の分配を繰り返してきたことに起因するが、これと裏腹に肥大した大村親族衆が一種の圧力団体となり純忠の政権を脅かしていた。事実、彼は大村家相続後、約三年切詰城での隠遁生活を余儀なくされていた。

その間、政権を預かっていた家臣が大村家を専断しているなどとの噂に疑心暗鬼となり、この老臣は後藤貴明のもとに逃れるなど、家臣団との信頼関係をも築けず、家臣を厳罰に処することもできず、生涯家臣統制は甘くならざるを得なかった。

この閉塞的状況を改善するには財政基盤の確立が求められていた。

このような状況のもとにこの事件は起こった。

一五五〇年六月、松浦隆信の庇護の下で平戸に根拠地を持つ明の海賊王直の招きにより、一隻のポルトガル船が入港した。南蛮貿易で利益を得ることを意図とした隆信は、これを歓迎し布教を許可した。そのため、一〇〇〇人の信者を得るにいたり、さらに増加する勢いになる。

しかし、貿易による利益は藩の財政を豊かにするものの、キリスト教布教に伴い信者が増し、仏教信徒などの反対勢力も増加していた。そのジレンマに悩みつつも、隆信はその問題を曖昧にして過ごしていたが、一五五八年には宣教師の領外退去を命じざるを得なくなった。

その事件は、起こるべくして起こった。

一五六一年八月、平戸の氏神七朗宮前で、一人のポルトガル商人と日本商人の争いがおこった。

最初それは埒もない言い争いだった。日頃から日本人の使う二重秤――売る計りと買う秤を変えて数量を胡麻かす――に業を煮やしていたこともあり、激しい言いあいとなったが所詮言葉が通じないためにこじれ、一束の生糸で日本人の商人が叩いたことに怒ったポルトガル商人が、仲裁に入った武士に切りつけたのが事件の発端だった。この争いはポルトガル船の乗務員が来援するに及び、松浦の家臣団も加わった争いになり、船長以下一四名のポルトガル人が殺害された。

しかも、松浦藩がこの加害者の処罰を怠ったことに怒ったポルトガル人は、報復手段として平戸への入港を一切やめることを決意し、他の良港を探し求めた結果、大村藩の横瀬浦が適当との答えを得るにいたった。

そこで京都で改心した日本人イルマン、近衛バルトロメオを使者として、密かに純忠の主席家老朝長伊勢守と談判し、布教を条件に入港を認めれば、貿易だけでなく、霊的にも利益を得るであろうと説いた。

南蛮船一隻が入港すれば少なくとも千クルサード――約八千石、知行の二倍――と言われているこの話に大村側が飛びつかないはずはなく、交渉は順調に進み、日本教布長トルレス――豊後に滞在―

―が大村領に来るのであれば布教を許し、教義を理解し望むものがあれば改宗させてもよいし、さらに、ポルトガル人の安全を保護し宿泊設備の提供をも申し出ていた。

この知らせに喜んだトルレスは、すでに年老い歩行困難にもかかわらず七月に横瀬浦に到着した。この知らせを受けた純忠は、早速進物を届けるとともに、数名の家老を連れてトルレスを訪問した。トルレスの喜びようは大変なもので、その後五名のポルトガル人を伴い純忠の宿舎を訪問すると、自分たちの住院で食事をするように請い、出来る限りのもてなしで接待に勤めた。そしてあらかじめ用意されていた聖母像のある祭壇に招いた。この祭壇を気に入った純忠は、修道士フェルナンデスの説教に耳を傾けた。

純忠は南蛮貿易をより強固なものにするため、受洗を決意すると首に十字架をつけて、兄の有馬義貞に会いに行った。その様子を見た義貞は「キリシタンか」と問いかけ、特に不快の念も表わさなかった。

この兄の態度に安堵し、受洗の決心をかためた純忠は、横瀬浦に向かいトルレスに日本語の良く分かるものを求め深更まで話し合い、一つの条件が満たされるなら受洗する旨を伝えた。

それは、姻戚関係にある有力大名の有馬義貞が熱心な佛徒のため、領内の仏像・寺院を焼き払うことはできないと言うことだった。トルレスはこれを認め、純忠はドン・パルトロメの洗名を受け、初めてのキリシタン大名となった。この時、配下の二五人も同時に受洗した。

こうして一五六二年六月に開港を見た横瀬浦には、平戸、博多、山口さらに京都などからも訪れる人多く、ポルトガル貿易港として急速に発展し、この事実が平戸の衰退をもたらせた。

また、純忠の受洗は多くの民衆にも影響し、横瀬浦と大村で一二〇〇人のキリシタンが産まれた。

しかし、キリシタンの勢力が増すと保守的な仏教徒の家臣の中には嫌悪感を示すものもおり、かねてより反純忠的感情を持つ後藤貴明と結託を図った。

内通者を得た貴明は、純忠とともにトルレス以下の修道士の殺害を企み、「我々も入信しようと思うが、大勢のため横瀬浦まで出かけるのは不可能なので、こちらで受洗させてほしい」旨純忠に伝えた。純忠はそのような企みとは知らず、喜んでトルレスに伝え、彼も喜び訪れようとしたが高齢の上病床にあったため、代りにドン・ルイスこと朝長純安を使わした。

反逆者たちは彼らが横瀬浦から船で来るであろうことを予想し、潮流の激しい伊ノ浦で襲撃する体制を取っていた針尾氏の手でうちとられ、ドン・ルイス一行は殺害された。

この知らせが大村藩の内通者に届くと、反逆者はただちに純忠の屋敷を襲った。

しかし、急襲された純忠は機敏に塀を乗り越えると、多良岳の寺に逃げ込み難を逃れた。

横瀬浦では、ポルトガル人が襲われるであろうとのうわさが流れると、船に逃れようとしたがこの争乱にまぎれて陸揚げした積み荷を奪おうとした仏教徒の商人などに、たちまち二、三人のポルトガル人が殺され町には火がかけられ、横瀬浦はわずか一年で灰燼に帰した。

その後、松浦氏の要請で司祭たちを再び招聘することを条件に、ポルトガル船が平戸に入港するようになったが、トルレスは大村家に敵する松浦家が利することをよしとせず、一五六五年八月には大村領の福田浦に入港させ、以後そこを貿易の基地とした。

多良岳に逃れていた純忠は間もなく大村に帰ると、謀反人も帰順してきたが彼はこれをほとんど処罰することができなかった。この復帰に約三年を要し、失意の純忠は容易に虚脱状態から脱することができなかった。

その後も、後藤貴明と内通するものの陰謀の根は深く、一五六六年七月には松浦氏を巻き込んだ反乱となり、松浦隆信は商品買い付けに平戸に来ていた堺の商人を扇動し福田浦のポルトガル船を襲ったが、ポルトガル船の大砲のため撃退された。

このような内乱において純忠は、ポルトガルからの鉄砲の貸与や銀の借り入れなどで戦費をしのぐ有様だった。

一方、先に開港した福田浦は直接外海に面し波も高く船舶の停泊には不便なため、より安全な港の設置が求められ多くの場所を測量した結果、長崎浦が適していることが判明すると、ポルトガルは長崎港の開港を求めたが、貿易による経済的利益を得たいものの、横瀬浦、福田浦と続く襲撃事件に、純忠は二の足を踏まざるを得なかった。

しかし、兄の有馬義貞の説得もあり、一五七〇年貿易の拠点とし翌七一年に貿易を主とするポルトガル船が入港し、ここに長崎の歴史が始まった。

こうして新しい貿易港となった長崎浦には、平戸、島原、博多などから棄教を迫られたキリシタン信者が多く集まり、早くも一五七一年には家屋が千を数えるにいたった。

しかし、後藤貴明や仏教徒を擁護する松浦、西郷などの連合軍にしばしば襲われ純忠は一度ならず窮地に追い込められ、ポルトガルからの武器支援などで凌いでいたが、度重なる襲撃についに彼は出家し理専と称した。

ザビエルより日本布教長を任されていたトルレスも老齢のためフランシスコ・カブラルに代わると、彼はトルレスが容認していた神仏崇拝はキリスト教の本義に反すると純忠に迫った。

さらに、純忠が出家したのを責め、キリスト教徒の証として寺社を焼き異教徒の追放を求めた。

そのため、一五七四年以降大村領内での寺社仏閣の破壊、仏教徒の改心が迫られ、反対者は領外に追放された。このころ、記録によると領内で二万人々が洗礼を受けたとされている。

このような時、一五七九年、我が国の布教状況を査察のため巡察師ヴァリニャーノが来日した。

ヴァリニャーノ

ヴァリニャーノは、一五三九年イタリア中部のキエーティの高貴な貴族の家に生まれた。結婚によりナポリ王家とも姻戚関係だった。彼は少年時代『神を恐れること、ラテン語、騎士道的精神』を学び、もっぱら武道に打ち込み、ヨーロッパ最古の名門バードヴァ大学に学び、一九歳で法学の学位をとったエリート中のエリートだった。が、ふとした愛情のもつれから女性を傷つけ、それがきっかけになり叔父の勧めでイエズス会に入会し三四歳の時インドに向かった。

インドでローマの総長より巡察師の指名を受けた彼は、事前に多くの報告書を読み、一度に大量の受洗者がでる不自然な日本の布教状況に疑問を感じていた。

この巡察師に最も恐怖を抱いたのはカプラルだった。彼の日本での布教状態が総括されるのだから当然と言える。

このカプラルは、同じ貴族出身の元スペインの軍人ではあるが、自己過信で自分に服従するものには盲信的な愛情を示すものの、反対するものにはあからさまな嫌悪感を示した。さらに、彼は日本人をきわめて傲慢で、狡猾な民族だとしていた。つまり彼の方法は、自分たちの鋳型にはめてヨーロッパ的人間を作ろうとしたのだった。そのため日本の習慣、風習を軽蔑し、相変わらず肉食をするなど自らの生活態度を変えようともせず、日本語を覚えようともしなかった。また日本人がポルトガル語を知り、自分たちの領域に入ることを恐れ、ポルトガル語を教えようとはしなかった。このため、コミュニケーションに円滑さを欠き、日本での布教は必ずしもうまく行われていなかった。

ヴァリニャーノが近隣の諸侯を表敬訪問したとき、「生活態度を変えるのは大変なことで、二、三年は仕方がないであろうが、数年に及ぶのに一向になじもうとしないのは我らを軽蔑しているものだと思う」といった、痛烈な言葉さえ聞かれた。

事実、大村領民はすべてキリシタンとはいえ、純忠の強制によるものが多く『名だけのキリシタン』が少なくなく、純忠の受洗も近隣諸国からの圧迫に堪えるための方便ではとさえ思えた。

このような事実に彼は暗澹とした。

信長

都での布教に失望しザビエルが日本を離れてから九年後、一五六〇年ガスパール・ヴィエラは将軍足利義輝の布教許可を得ることに成功するが、異教徒を排除しようとする佛徒の強硬な抵抗を受けていた。さらに、当時の都は『三好三人衆』の家臣、松永弾正が権力を握り、都は争乱に明け暮れ惨憺たる状態だった。しかし、この間にも信者は少しずつ増え、高山飛騨守――高山右近の父。高槻の城主――結城山城守など近隣の二三の大名が洗礼を受けていた。

一五六五年ヴィエラ神父を助けるため都入りしたフロイスは、松永弾正が将軍義輝を惨殺するのを目撃することになるが、この混乱に便乗し熱心な日蓮宗徒であった松永は、この機会にキリシタンを殲滅しようとしたため、多くの信徒が都から近隣のキリシタン大名の領地に逃げ込んだ。

一五六八年、『天下布武』を掲げ将軍義昭を奉じて都に織田信長が入った時、三人衆の味方をしていた堺の街は、信長の討伐を懼れ恐怖におののき盗賊が跋扈したが、信長は五人の武将と一万五千の兵を送り込み堺の治安を回復し安堵した。

このような信長の際立った施策をみたフロイスは、天皇や将軍に求めていた布教の許可がいずれも実効を伴わずにいたので、彼こそ盟主とみると高山に橋渡しを依頼した。

この噂を聞いた内裏は、信長に引見しないように求めたが、信長とフロイスの引見は行われた。

引見は、工事中の二条城の工事現場で行われた。床几に腰を下ろした信長は、

「神父がそのような遠い所から来た動機は何か」と、問いかけると彼は、

「人類の救い主であるデウスの御心にかないたいという熱望以外にはいかなる考えもなく、いかなる世俗的な利益をも求めるものではない」と強調すると、

「ただ、それだけのためにそのような遠くから危険を冒し自ら望んできたのか」

フロイスが「全くその通りだ」と答えると、信長は満足げにうなずいた。

そこで彼は「自由に都で布教出来る許可をえたい。その恩恵によって、殿下の偉大さが世界に伝わるであろう」

このフロイスの言葉はひどく信長を喜ばせ、さらにフロイスが将軍を本来の位置に戻したことは正義の行いだとほめると、信長はうなずき同行していた家臣に、今工事中の天皇のための御殿や城を見せ、将軍のところに神父たちを案内するように命じた。

この群衆の前で行われた引見は、広く都の人々に彼の方針を示す方便であった。

フロイスは朱印状が手にした。

信長は、神父たちが国王から公的に派遣されていることを確認すると、神父たちを招き会見した。

彼が喜んで神父からもらった贈り物に地球儀がある。これを持ってこらせると、「どのような道を通ってきたのか示せ」と、インドやヨーロッパの国情を聞き、その文化の高さを知るとともに、『一人の王の下に』統一されたポルトガル、スペイン王国に特に関心を示した。

また、宇宙の中心に須弥山があり、その頂上に帝釈天の宮殿があるなどとする象徴的な仏教の宇宙観とはちがい、『地球が球体であり、それはセビリャから西に向かって船を進めると、やがてまたセビリャに戻ってきたことで証明できる』、『太陽は地球の周りを運行している(地動説が公にされたのは一五四三年でまだ一般的になっていなかった)』など、目で見える現象で説明する彼らの知性を愛した。

しかし、信長は、神の存在、来世など宗教については一切触れることはなかった。

このような好意を見せる信長に、フロイスが建設中の安土城下に教会の建立を願い出ると、彼は機嫌よくその願いを受け、宗教施設をいっさい許していなかったにもかかわらず、城の麓の目立つ場所を彼達にあたえた。さらに教会の屋根に安土城と同じ青い瓦を使うことを許可した。

三階建ての建物は信長の応援もあり一か月で完成した。

このような都での盛況さを地区長オルガンティーノは、巡察師ヴァリニャーノに見せたいと案内人を送って関西視察を要請した。

ヴァリニャーノ

堺についたヴァリニャーノは、高山右近の騎馬隊に迎えられ京に向かった。ヴァリニャーノはこの二八歳の若者が大名であるにもかかわらず謙譲で礼儀正しく、まるで下僕のように接する右近に驚嘆の眼差しを向けた。途中の高槻では、巡察師を迎え五畿内ばかりではなく尾張、美濃からもキリシタン武士が殺到して会堂を埋めた。十字架のそばには甲冑に身を固めた一二人の武士が、天使のように着飾った二五人の少年とともに並び祝日を盛大に祝った。

復活祭の水曜日、一五八一年二月二八日信長に謁見した。フロイスとオルガンティーノが供として付き添った。

幼少から騎士として育てられ武人のたしなみのあるヴァリニヤーノは、高貴で美しく、何にもまして日本の礼節を知り、善良だが少しおっちょこちょいのオルガンティーノや教養のない――ヴァリニヤーノは法学博士の学位を有している――フロイスとも異なる知識人だった。

信長は、背丈、その品位に圧倒され、諸侯の前に出してもびくともしないだろうと思った。

ヴァリニヤーノは贈り物として持参した鍍金の蜀台、真紅のビロード一反、切り子のグラスを差し出した。

上機嫌の信長はフロイスの通訳で、彼の辿ってきた海路など世界地図を見ながら説明させ、彼がインド支部から派遣されているフロイスやオルガンティーノなどの宣教師と違い、ローマの総長の命を受けて視察にきたことを知った。信長が終始熱心に話を聞き、長時間議論していたのも異例だが、帰り際にフロイスを呼びとめると「今、坂東の大名から贈られてきたものだ」と、立派な鴨一〇羽を彼に託した。この信長の行為は家臣を驚かせた。

一回目の会見はこのようにして終わった。

さらに信長は、三月五日に行われる馬揃えに彼らを招待した。

信長は巡察師、神父たちを高台に特別な桟敷を造りここに招いた。諸国から集まった見物人は二〇万にのぼり、内裏も姿を見せていたがこれは天皇よりヴァリニャーノを賓客として扱ったものだった。

競技への参加者は一三万を超えた。信長は馬六頭を前触れにし、立烏帽子に黄色い衣、白袴をはき、紅梅の小袖を付けた者二一人、つづいて、薄紅梅の小袖に半片、皮の袴の小者三〇人余りをつれ、金の装飾をした濃紅色のビロードの椅子を四人の男に担がせ登場した。

この椅子はヴァリニャーノが贈ったものだった。事前にこの祭典があるのを知っていた彼は、フロイスが、信長にヨーロッパの諸侯の行列について、『椅子のついた輿に乗ってくる』と話したところ大変興味を持っていたとの報告から、この椅子を贈り物としたのだった。

諸国からの大身のみならず庶民も多かったので、これは恰好なキリシタンの宣伝となった。

この時の信長は、『金紗』という唐織物をつけ――中国では天子が用いるもの――、後ろに花を差した帽子をかぶり、紅梅に白い模様の小袖をまとった華やかないでたちだった。

競技への参加者は、一三万を超え、信長はたびたび馬を変え、息子たちと登場し、柴田勝家以下の家臣団もいずれも色鮮やかに着飾り織田軍団の威容を誇った。

また、ある日建設された教会を訪れてきた信長の様子を、『一五八一年の耶蘇会年報』は次のように述べている。

> 突然訪れてきた信長は、部下を下に押しとどめたまま、最上階に昇ると、神父たちと親しみを持って語り合い、備え付けのクラヴォやヴィオラを見るとこれを演奏させ、喜んで聴いた。またこれを演奏した少年たちを褒めた。

事実、ヴァリニャーノは少年たちが奏でるクラヴォとヴィオラに聞き惚れて、なかなか帰ろうとしなかった信長にひどく感激し、この光景は彼の脳裏に深く刻まれた。

このように信長の恩顧を受けられたのは、地区長オルガンティーノの布教の姿勢にあるのをヴァリニャーノは見逃さなかった。

イタリア人で、天衣無縫のお人好しのオルガンティーノは、味噌・醤油など日本の食生活にも馴染み日本語を話すだいの日本贔屓で、『うるがん様』と呼ばれ信長や庶民に愛されていたのだった。

このような成果に初めて愁眉を開いたヴァリニャーノは、イエズス会の総長あての書簡に次のように記した。

> 日本人の性格、風習は我々とははなはだ異なり、ヨーロッパで行われている布教の姿勢をそのまま持ち込むことはできない。彼らは極めて礼儀正しい。貴族ばかりではなく、一般庶民も驚くほどの礼儀をもつ。また、人々は有能でありすぐれた理解力を持ち、いずれもすぐれた理性の持ち主である。その点においてはアジアの諸民族のみならずヨーロッパ人より優秀である。

彼は、日本が野蛮な未開国でなく異なる文明を持つ国であることを理解すると、ポルトガルやスペインが行っている軍事力を背景に植民地化する政策に反対し、日本にセミナリオ(神学校)、ノビシアド(修錬院)、コレジオ(学院)などの教育機関を設けヨーロッパ人には日本語を、日本人には外国語、神学を学ばせ日本人司祭を養成し布教に努めるべきだとの考えを固めた。

やがて、ヴァリニャーノが帰国するとの噂を聞いた信長は、彼に一対の屏風をローマ教皇への土産として託した。

この屏風は、信長が狩野永徳に安土城を描かせたもので、彼が大変気に入ったものだった。

絵には、高いところに真っ白な外壁で囲まれた七層の城が描かれていた。最上階のみは金色と青で塗られ輝き、花に金を塗ったようだった。麓には家老たちの屋敷や湖も正確に描かれ、出来上がったばかりの安土城下街が再現されていた。

ヴァリニャーノは、この絵をかつて内裏が求めたとの噂を聞き、自分に贈られたことに信長の並々ならぬ好意を感じ、お礼に参上し「必ず、ローマ教皇届ける」と約束すると、信長は満足げに笑った。

――この屏風は、バチカン宮殿の地図の間に飾られていたが、いつの間にかなくなった。多分湿度などの関係で傷み、保修の方法もわからず別な場所にしまわれたと思われる。――

天皇でなくローマ教皇に贈ったことは、信長の眼は、国内ではなくすでに世界に向けられていたのだった。

ヴァリニャーノは、一二月に長崎に戻ると彼の改革を実行した。そのため、この一連の改革に不満のカプレラを罷免しガスパル・コエリヨを布教長に任じた。これが後に問題を起こし、禁教の導火線になるのだが……。

この計画に従い有馬にセミナリオが、大村にはコレジオが設けられ、インドからの外来宣教師はここで日本の風習、日本語を学ぶことした。

ヴァリニャーノは、日本はヨーロッパとは異なる文明の国ではあるが、人はきわめて礼儀正しく、聡明で、道理に従い、布教に適していると考えていた。しかし、神父の不足、日本人神父の教育制度の不備、経済的窮乏から、キリシタン大名の名代の使節を送り、日本の布教状況をローマ教皇に知らせ、積極的な援助を引き出すため、自らローマに行くことを決意したのは一五八二年正月明けの一月六日だった。

フロイスはこのことについて次のように述べている。

> パードレは、天の主信長から多大の厚情、歓待を受けて下に――北九州に――戻られ、インドからローマへ向かう準備をなされた。かねてより大友宗麟、大村純忠、有馬晴信のキリシタン大名の使節をローマに派遣することを考えていたが、これらの諸侯に別れを告げに訪れたときにわかにこれを実行しようと思い付いた。

しかし、マカオへ行く船の便は二月までで、それ以降は一年待たなくてはならないため、準備は急を要した。ヴァリニャーノは、最も昵懇な大村純忠と面談し、彼の甥千々岩ミゲル(一三歳)を名代に、大友宗麟は親せき筋の伊東マンショ(一四歳)を選び二人を正使とした。また大村、有馬の家臣の子息から中浦ジュリアン(一四歳)、原マルチノン(一二歳)を各々副使とした。

少年を選んだのは、長旅に対する健康上の理由ではあるが、日本人に直接キリスト教文化を見せることで彼達が語り、多くの人が信じるであろう効果を狙ったのは事実だが、その後神父としての布教活動をも期待したのだった。

一五八二年二月二〇日、ヴァリニャーノを団長に、その意図を最もよく理解しているメスキータ神父とともに四人の少年使節は、大村、有馬、大友諸侯の書簡を携え長崎を出発した。

このわずか数カ月あとに、信長が本能寺で倒れるのを誰が予測できたであろうか。

また、この時がキリシタンの日本布教の絶頂期であったことを……。

フェリペ二世

一五八四年八月一〇日、マカオ、ゴアを経由し二年六か月を要した一行は、サンティアゴ号でリスボンに入港した。ゴアでインドの管区長に任じられたヴァリニャーノは、旅の引率をメスキータに任せるとともに、少年たちに特別な待遇をさせないように指示を与えた。そのためメスキータは人目につかぬよう暗くなってから上陸し、サン・ロケにあるイエズス会の住院に入った。

しかし、この話が、ポルトガルの統治を任されているアルベルト枢機卿に報告されると、彼は、早速白い4頭の馬に曳かれた黒い緞子の帳で装飾された自分専用の車を差し向けてきた。

この謁見の時、マンショとミゲルは口頭で宗麟、純忠、晴信の口上を述べ、メスキータが通訳した。

枢機卿は、日本に派遣されている宣教師の労を見て喜び、使節が腰にさしていた日本刀に興味を示すと、手に取り感嘆の面持ちで眺めた。

この噂が流れると、多くの人々に招待され歓迎を受け、リスボンでの滞在期間は二六日に及んだ。九月五日、一行はいよいよマドリッドを経てローマに向かうため、リスボンを立ちエヴォラに向かった。

エヴォラ大司教ドン・テオトニオ・デ・ブラガンサは、彼らの和服姿、慇懃に敬意を表す態度に喜び、メスキータが日本の書物数冊を見せると、日本の文字を興味深げに見、また、彼達が書いたラテン語の文章を読んで、短期間にこれだけのことを覚えたのに驚嘆した。

さらに所望されて、マンショとミゲルがパイプオルガンを演奏すると、皆その技量に驚き絶賛した。

このようにして、トレドにたどり着くと折悪しく疱瘡が流行していた。これにミゲルがかかり一六日滞在し、ようやくマドリッドに着くとマルチノンが高熱を発し、心配した国王は侍医を派遣して治療にあたらせた。その間に使節の評判は、上流階級にますます広まり、訪問者が後を絶たなかった。

時あたかも王太子の宣誓式が行われる一一月一一日が近かったので、メスキータは国王に、この世界帝国の絢爛豪華な世継祝典を使節に見せることで、彼達がフェリペこそ世界の王と吹聴するであろうと祝典の陪席を求めた。国王は頷くと、すでに定められていた貴族の高台の席を後ろに寄せると、最前列に彼達の特別席を設けさせた。

この様子をフロイスは、次のように述べている。

> 祝典は、中央の金と絹で覆われたひな壇に設けられた天蓋の付いた高台の黒いビロードの椅子に国王が座し、そばの小型の椅子にわずか六歳七ケ月の王太子が座った。このひな壇の右手には教皇使節、神聖ローマ皇帝使節、ヴェネーツィア特使など大国の特使が並んだ。

キリストの像が掲げられた祭壇に向かいトレドの枢機卿が、主だった王国の九二人に宣誓させた。

宣誓式が終わった一一月一四日、フェリペ二世に謁見するため王宮を訪れた。一行は和服、刀、脇差で正装し国王が差し向けた二台の馬車に乗ると、人々の好奇心にさらされないよう、帳を下ろして王宮に向かった。しかし、馬車を降りると群衆が殺到し、動くことができず衛兵が道を開けさせ、ようやく王宮に入ることが出来た。

国王は、ごく親しい者と会うときに使用する奥の間にいたので、彼達は一二の部屋を通り抜けねばならなかった。

少年たちがその部屋に入ると、国王、王太子、王女が皆起立して一行を迎えた。

黒の衣服に、ハブスブルグ家の名誉を示す金羊毛勲章をつけた国王に、マンショが進み出て恭順を示すためひざまづき手に接吻しようとすると、国王は押しとどめ、彼を立たせると親しげに抱擁した。王女たちもこれにならった。

国王は、絹の地紋のある白地に鳥や花を染め抜き、金糸で刺繍されている和服に興味をいだき触って見ていた。また、刀を手に取ると鞘の図柄に見とれた。続いて、金箔をちりばめた漆の鉢や文箱などが献上されると、その技術の精巧さ細工の巧みさに目を見張った。

さらに、大村、有馬、大友の諸侯から世界の王たるフェリペ二世に恭順を示すため派遣された旨を述べ、諸侯からの書簡を奉呈すると、彼は日本語で読むことを求めた。

読み始めると、国王は近寄り書簡を覗きながら縦に読むのに驚き、また聞きなれない言葉の奇妙な発音には、笑いをこらえきれず陪席した延臣はこの情景に喝采した。

フェリペ二世がこの使者たちに歓喜した様子を、後にフロイスは、『寵臣たちが、国王がこれほど機嫌よく待遇したことは見たことがない』と、書いている。

フランチェスコ一世

マドリッドを発った一行は、スペインのアルカンテから船で、三月一日、イタリアのリヴォルノ港に到着した。ここはトスカーナ大公国で当主のフランチェスコ一世は、文化の保護者として名高いメディチ家の一族である。彼は、リヴォルノの代官から『地の果、東洋からの王子』の到着の知らせを受け取り、スペイン国王に歓待され公式謁見されたのを知ると、――当時、イタリアはスペインに支配されていたが、『ピレネーの向こうはヨーロッパでない』と、スペインを田舎者扱いにしていた――負けてはならぬと代官に出来る限りの歓待を命じ、船を降りるときには礼砲を轟かせ、馬車三台を迎えに赴かせた。衛兵に導かれた一行は、数多くの松明が照らす中をピザの宮殿に向かうと、玄関で待ち受ける大公兄弟に迎えられた。

トスカーナ公は、イタリアで最初に使節を迎えたのは自分であり教皇も喜ばれると、狩りや大舞踏会を催した。舞踏会で公妃がマンショに踊りを求めると、彼はパードレに許しを求めた。この彼の謙遜な態度が皆の感動をよんだ。

トスカーナ公の供応はそれに留まらず、フィレンツェに招待すると、カーニヴァルやステーファノ騎士団の儀式などを見学させ一行をさらに喜ばせた。

しかし、この例が各地の都市国家からの招待合戦を招く結果になり、帰路にヴェネーツィアなど各地を訪問せざるを得なくなった。

グレゴリオ一三世

ヴァリニャーノは、ローマのイエズス会総長に使節たちが王子のようにもてはやされないよう、たびたび書簡を送り依頼していた。彼は教会の世俗化した姿を彼達に見せるのを躊躇したのだった。そのため教皇にも私的な引見にとどめるよう強く要望していた。

これは当然の懸念と言える。あの宗教革命の首謀者ルターの革命論は、ローマ巡礼により、廃頽しきった教皇庁をつぶさに見たことに起因しているのだから……。

一方、教皇庁はスペイン国王フェリペ二世が公式に謁見しなどの情報を得て、使節の身分などを吟味した結果、正式な使者であると認めると教皇グレゴリオ一三世は、

「イエズス会の私情よりも、教会の公の名誉が先んずる」と、『国王と同じ待遇』つまり『枢機卿列席公開謁見』を開催することを決定していた。

そして、教皇はイエズス会が控えめに遇することを懇願すればするほど、彼達の謙虚さと受けとっていた。

ここに少年使節団は、神聖ローマ帝国皇帝やフランス国王といった君主と同様に、『帝王の間』にて枢機卿会により教皇に謁見を賜ることになった。

三月一三日使節団一行はフィレンツェを出発すると、オリーブ・葡萄がつらなるトスカーナの自然の風物の中をローマに向かった。教皇は三〇〇名の兵を国境まで遣わせ一行を護衛した。

途中で中浦ジュリアンが発熱したため、カプラローラの枢機卿ファルネーゼの壮麗な屋敷で休養した。目指すローマはわずか一日の旅程だった。

この知らせを受けると教皇は、軽騎兵二隊を派遣し、急ぐよう督促しローマに向かわせた。途中教皇の甥ソリア公が遣わした軽騎兵も加わる盛況さだった。

ヴァリニャーノから、出来るだけ目立たないようにと指示を受けていたメスキータが、日が暮れてからローマに入ることを希望したが、教皇の指令に逆らうべくもなかった。

やがて一行が、ローマの入口ポポロ広場のファラミニア門をくぐると、騎兵隊は高らかにトランペットを吹奏し、市民に一行の到着を告げた。好奇心に駆られた群衆は、この『地の果てから来た王子たち』を見ようと馬車に寄り添うようにして走った。

一行がイエズス会本部に到着すると、総長アクアヴィーヴァはじめ同会のメンバー二〇〇人が総出で迎え、総長は遠く極東の地で孤軍奮闘する朋友たちの労苦を思いやり、彼達が播いた種が実りつつあるのに感動すると、使節を一人づつ抱擁し涙を流した。

一行は、おびただしい数のローソクが灯された聖堂に、四つの炬火に先導され入場すると、オルガンが奏でられ、白衣の聖歌隊が『デ・デウム』を合唱する中を主祭壇前に近付き跪くと、長旅の安全を加護してくれた神に感謝の祈りをささげた。

翌三月二三日教皇の謁見を賜る日、早朝スペイン大使がさしまわした馬車に一行は乗り込んだ。

一行は、ポポロ広場を一旦出ると、教皇の公式謁見が始められる出発点と慣例になっている、教皇ジュリオ三世の建てた別荘に赴いた。すでにローマの名士、高位聖職者が続々と集まる中で、前日から高熱を発していた中浦ジュリアンは、とても行列に参加できる状態ではなく、ピンチ猊下が窓を閉じた馬車に移し、バチカン宮殿に連れて行くと教皇は喜んで彼を抱擁し、臨席を懇願する彼に「今は汝の健康の身を考えよ。全快することが予の慰めである」と申され、全快後の会見を約されるとジュリアンは感激して退出した。

行列は、スイス兵に付き添われた教皇の騎兵隊を先頭に、トランペットを高々と鳴らしながら進んだ。続く桑の実色の布の鞍かけで華やかに飾った枢機卿の騾馬が続く。騾馬には赤い頭巾をかぶった家臣が乗り、揃いの深紅の衣装の家臣団が続いた。この日のため集まった枢機卿は多く、この行列は、延々と続きその後をローマに駐在する各国の大使たち、教皇のそばに仕える聖職者たちが真っ赤な長い衣で行列した。

さらに、ローマの騎士団のすべての騎士が続き、一三人の鼓手が太鼓を打つ中に黄金で飾った黒のビロードの覆い布を掛けた駿馬に乗った三人の使節が現れた。彼らは白い羽と金の房の付いた帽子をかぶり金糸や色とりどりの糸で織った白い絹の衣装で、漆塗りで装飾された大小を帯び、伊藤マンショを

先頭に、千々岩ミゲル、原マルチノンが左右に大司教を伴い登場すると、沿道の観衆はこの『地の果てからの少年』に驚嘆し歓喜の声を上げた。

行列は、ポポロ広場から出ると、観衆が詰めかけていっぱいのナヴォーナ広場を左に見ながらテヴェレ川沿いに進んだ。どの街角でも窓は人で埋まり、群衆が歓声をあげこれを迎えた。

いよいよ行列がテヴェレ川を渡ろうとすると、対岸のサンタジェロ城――歌劇トスカの舞台の城――から最初の祝砲が響くと、三〇〇発が発射され、これが終わるとあたかも待ちかねたようにバチカン宮殿の祝砲が鳴り響いた。大砲が終わるとサンタジェロ城から静かな楽の音が響いてきた。

使節がサン・ピエトロ大聖堂の前を通り大広場のなかほどに進んだ時、一行を歓迎するために配置されていた親衛隊が一斉に銃を発射した。この時驚いた馬が棹立ちになりかけたが、三人は少しもあわてず馬を御した。広場は立錐の余地もなかった。

三人の少年は、この歓喜に包まれながら、謁見式が行われる王の間に向かった。

教皇グレゴリオ一三世は八四歳の高齢ながら、背高くしっかりした骨格で若いころの偉丈夫さを想像させるものの、さすがに真紅のマントは重たげに見えた。頭に金色の司教冠をかぶり、白髭をたくわえていた。

まず、伊東マンショが進み出て平伏し、御足に、身を起して手に接吻すると、教皇は身をかがめ膝まづくマンショを抱き起こすと、抱擁した。ミゲルも、マルチノンもこれに倣った。

マンショが再び御前に進み出て、大友宗麟――ドン・フランチスコ――の書簡を日本語で読み上げ、メスキータがイタリヤ語に訳した。三人の書簡が朗読されたあとローマイエズス会の古典に通じたガスパール・ゴンサルヴィーネがラテン語で演説した。彼は、

「日本の島は海に遠く隔てられ、我々は名前以外なにも知らない。そして、今でさえその存在を信じない人のほうが多い。しかるに、聖なる教皇よ、それは存在するのです。存在するのみでなくそこに住む人々は、礼儀正しく、すぐれた知性を持ち、もし神の言葉さえ知るなら我々に劣らない人々です。近年あの異端――プロテスタント――に抵抗しカトリックの復興にあらゆる努力を傾けてきた教皇の成果が地の裏側の国にも及んだのです。我々が失ったものも多くありましょうが、それを補って余りあるものです。かくして苦しみと涙は、悦びに代わるのであります。すぐれた君子は太陽のごとく光を世界に及ぼすとのたとえのごとく、教皇猊下の光はヨーロッパのみならずインド、中国、そして日本までに及んだのです。父よ、わがイエズス会の初の成果として、この使節を受けたまえ！」

この時の教皇の様子を教皇の顧問、サン・セヴェリーナ枢機卿はこう書いている。

『日本の使節らが教皇への献身を示すために来たと言われたとき、教皇は心を打たれ、滝のように涙を流された。そのとき、私はおそらくこれが教皇の人生における最後の勝利であり、最後の歓喜ではないかと思った』

グレゴリオ一三世は、この謁見式を終えると、わずか一八日で亡くなった。

使節団は、宗教改革に対するカトリック教会の勝利の証言者であるとの役割は、新教皇シスト五世の戴冠式にも使われ、使節団は主賓として招かれた。サン・ピエトロ大聖堂で行われた祭典に、少年た

ちはヴェネーツィア公使とともに旗を担ぎ、マンショは教皇が手をすすがれる水を注ぐ大役を仰せつかったのだった。

使節たちの旅立が迫った日、ローマ元老院は彼らにローマの市民権を与え貴族に列した。

六月二日早朝、一行はローマを発った。すでにローマでの使節団の噂はイタリア各地に広まっており、各所から招待を受けたが、帰りを急ぐ彼達は多くは断らねばならなかった。しかし、ヴェネーツィア、ヴェローナ、ミラノなど教皇庁にとってゆるがせにできない国には立ち寄らざるを得なかった。行く先ざきでは、地球の裏側にも及ぶイエズス会の布教活動に称賛の声を上げるとともに、日本を知り、幼い少年たちが危険を冒し遠くからやってきたことに皆感動した。

一行がリスボンに帰りついたのは翌年一五八五年一一月下旬だった。

一五八六年四月一二日リスボンを発った一行がゴア、マカオを経て、長崎に到着したのは出発してから実に八年六か月を要した一五九〇年七月二一日だった。

すでに、ゴアに着いたとき信長は一行が旅立った四か月後に光秀の反逆に倒れ、秀吉が天下人となり、キリスト教の禁制がひかれ宣教師が追放されていること、さらに大友宗麟、大村純忠もすでに死去したのを知った。

このような状況を知ってヴァリニャーノは、この使節とともに日本を訪れ、キリスト教の禁制を解かせる絶好の機会だと判断すると、インド副王の代理として書面を携え一行とともに日本に向かった。

秀吉は、この行為に満足し完成まじかな聚楽第に一行を招いた。

彼は、紫と黒のビロードの馬布を付けたアラビア馬、ミラノ製の甲冑二領、鉄砲などの贈り物に満足し、さらに四人の少年がクラヴォ、ハープ、リュート、ヴィオラで『皇帝の歌』を演奏すると、喜び三度も所望するありさまで、自らも楽器を手に取り、このような楽器を日本人が弾けるとはとても思えなかったと上機嫌だった。

しかし、猜疑心の強い彼はポルトガルの武力支配を恐れ、禁制を解こうとはせず、むしろ秀吉の機嫌を取り結ぶため、諸侯の宣教師に対する圧迫は増すばかりだった。

このような情勢の下で長崎に戻った四人は、イエズス会に入会した。

エピローグ

ルネッサンスの洗礼を受け眩くキリスト教文明に直接接し、また日本を知らしめた文化使節の栄光に輝く少年たちは、禁制下の日本でどのような生涯をおくったのだろうか。

正使筆頭の伊東マンショは、長崎のコレジオで学びマカオに留学し司祭となり戻ると、小倉に赴任し山口・萩・日向などに赴き伝道していたが、領主の細川氏に追放され長崎に戻り、一六一二年四二歳で病死した。

最もラテン語が堪能だった原マルチノンもマカオに留学し、マンショと同時に司祭になると、宗教書の翻訳、ラテン・ポルトガル・日本語辞書の編纂などに携わっていたが、マカオに追放され彼の地で死亡し

た。六三歳だった。

キリシタン弾圧のあらしが吹き荒れる一六三三年、長崎で一人の老神父が殉死した。二日二晩の拷問に耐え殉教した神父こそ、中浦ジュリアンだった。

刑場に引き出された彼は、「われこそは、ローマを見た中浦ジュリアンである」と、誇らしげに絶叫した。

正使の一人千々石ミゲルについては、一五九三年の『伴天連記』に次のように記されている。

『しかる処に、大村のうちに千々石静佐衛門と言う侍あり。一〇年学問して後、日本に帰りエキレジャのゆるまんして居りしを、伴天連を少し恨む仔細ありて寺を出る。大村公に奉公す』

これにより棄教したことは知られているが、以後のミゲルの記録はない。どのように生き、いつ死んだのか誰も知らない。

ミゲルの棄教に興味を持った私は、『大村家秘録』にわずかに残る痕跡から、ミゲルを追ってみた。

ミゲル、お前がリスボンで初めてサン・ジョルジュ修道院を見たときの驚きを覚えているか。

マヌエル様式の集大成とも言うべき、レースのように繊細なレリーフを施された回廊、大伽藍の二〇メートルは優にあると思われるドーム型の吹き抜けの天井、それを支える柱が生み出した圧倒的な量感を持つ空間を。

それを可能にした富と技術に。また数十年を要して造り上げたというその情念に。

都市は壮麗な教会の建築物を中心に創られ、その内部を飾る芸術品もすべてキリストを賛美するためにあり、文化に対するキリスト教の影響力に目を見張った。

そのクライマックスは、教皇グレゴリオ一三世との謁見式の場だった。

お前は、ポポロ広場からバチカン広場までつながる行列の中で、祝砲に驚く馬を見事に御し、教皇の抱擁を受けた。

ヨーロッパ滞在中は、『地の果ての王子たち』との評判は高く、各地から招待を受け武士としての矜持を保つべく、緊張した日々を送っていたので、見たこと聞いたことすべてを、無批判に受け入れていたが、帰路ゴアに達する頃には物事を見直す余裕も出てきた。

初は違和感にすぎなかったが、ゴアでヴァリニャーノの書いていた『見聞録』を見たときだった。

この『見聞録』は、教育用のもので、お前たちが帰還して縁者と対話する形で書かれている。

例えば、お前が純忠の息子リノと晴信の弟レオ――対話中の仮想な人物――に、インドを支配するポルトガルについて話す場で、

リノ　「インド副王がそのように大きな権力を持つと、国王に謀反を起こす危険があるのでは…」

ミゲル　「いや彼達の道徳観念からするとそのような危険はない。なぜなら、キリスト教を奉じる貴族は、自分の国王に謀反を企む心情はまったくないのだ」

レオ　　「どうか日本でもキリスト教が広まり絶え間なく続く戦争が終わり、平和をもたらすように」

このように書かれた『見聞録』の自分の言葉を客観的に見たとき、ヴァリニャーノ師に教わったことを、おうむ返しに応える自分の言葉になにか言い知れぬ違和感を覚えた。それは当然だったと言える。

お前は知る由もなかったが、ヨーロッパの平和は、力のあるものが支配した平和で、キリスト教がもたらしたものではない。元にインドもポルトガルが武力で抑え植民地化しているにすぎないのだから……。

ミゲル、お前が漠然と疑問に思っていたことが、事実として現れたのはマカオでモーラ神父と会った時の彼の証言だったと思う。

モーラ神父の証言

私は区管長コエリェ神父の命令で、故国に日本の情勢を知らせるためヨーロッパに向かったのですが、マカオで巡察師ヴァリニャーノ師と出会い、私の受けてきた任務についてすべてを打ち明ける決心をしました。

平戸での会議の席上、大村、有馬藩は弱小勢力で、松浦藩及び竜造寺勢の圧迫を常に受けている。そのため、この有力なキリシタン大名を支援するため、長崎に城砦を築き、ヨーロッパから援軍をと言う話までに発展しました。

私たちは皆反対したのですが、賛成者のコエリェとフロイスの二人は、地位にものを言わせて軍備案を推し進めるように私に指示したのです。

これを聞いたヴァリニャーノは、その無謀な計画に驚き、そのような行為が『キリスト教を征服のための道具』との疑惑を秀吉に持たせ、日本でのキリスト教布教に壊滅的打撃を与えるだろうと激怒されました。

この話が漏れたのです。

ある時、私を囲んで旅の土産話などをしているとき、ミゲルが突然「日本の神父の間に軍備を求める話があるとうかがっているが……」と、唐突の質問を受け私は驚き戸惑ったのですが、いずれ日本に帰れば分かる話なので、真実を打ち明けたほうがいいと思い、すべてを話し、「いずれ、ヴァリニャーノ神父が鎮めてくださるだろう」と話したのですが、その時のミゲルの怒気を含んだ顔を忘れることができません。

一つ疑いだすとその波紋がみるみる広がり、『清貧を旨とする』と教えられていたのに対し、枢機卿など高位聖職者の生活の贅沢さなどが思い浮かぶ。その疑問を解く鍵などを見つけるべくもなかったが、疑念だけはますますその輪を広げていた。

幼児に何も知らずに洗礼を受け、キリスト教の世界観に支配されていたお前は、社会の真実を見抜くには若すぎたが『教義と全く異なる生活をしている』と感じたとき、つまり『教義と現実の生活』の落差を感じたとき、キリストの教えに疑問を感じだしたとしても無理はない。

そのような疑惑はさらに発展し、『この使節団は、なんだったのだろうか……』、『あのような歓待を受けたのはなぜだろう』と思いだすと、お前はヴァリニャーノ師の傀儡ではなかったのかとさえ思いだした。

お前は教皇の謁見式の時、ガスパール・ゴンザルヴィスが行った、『苦しみが悦びに変わる』と述べた演説を覚えているだろう。

一五一七年ドイツで、ローマ教皇庁の腐敗ぶりに呆れ、これを非難するマルチン・ルターの書いた『九五ケ条の意見書』は、野火のように燃え広がり、フランスではカルビンがこの運動を支持し、この異端派――プロテスタント――の反抗は、ヨーロッパ一円に及びカトリック教会は多くの信者を失っていた。

ゴンザルヴィスが、この使節を宗教革命に対抗するカトリック教会の勝利と位置づけた演説は、宗教革命により多くを失い、新たな信者を求めていた教皇の泣き所を抑えた名演説だったのだ。

このようなカトリック教会が守勢にある情勢下で教皇は、この『地の果、日本』での布教の成果を高く評価したのは当然だった。さらにこの『地の果ての王子たち』の訪問を、教皇庁がプロパガンダに利用しようとしたのも自然の成り行きだったのだ。しかも、その噂は各地に広がり予想以上に素晴らしい広告塔の役割を果たしたのだ。

例えば、一行を迎えた北イタリアの町ピチェンツァでは、街をあげて歓迎の宴を張り、その様子が今でもオリンピア劇場の壁画として残っているのでもその熱狂ぶりを見ることができる。

ローマへの往復路での各地の招聘合戦、及びこの年に刊行された少年使節団の関する印刷物が三八種類、二年後には実に八〇種類の刊行物が出ているのでも、彼の地の熱狂ぶりが分かる。

お前たちは、それまでマルコポールが『東方見聞録』の中で伝聞として伝えていたジパング、日本を実際に目に見せて知らせる文化使節の役目をはたしたのだ。

お前はヴァリニヤーノが企んで、お前たちを傀儡のごとく扱ったのではとの疑惑を持ったようだが、それは違っている。彼は単に日本での布教の成果を報告し、経済的な援助を得るためにこの使節団を派遣したのだ。事実、メスキータには見世物となるような行為、すなわち日本式の羽織、袴、大小を差すなどは公式の場のみにするよう指示し、宿舎なども豪華なものをさけ清貧な生活に徹するよう、また教皇には公式の謁見ではなく個人的な謁見を要求していたのだった。

しかし、全くヴァリニャーノの予測しなかった事態に発展したのだが、教皇が流した涙は、幼いお前たちが遠くから多くの危険を冒し、ローマまできたことに対する率直な感動であり、慈しみだったのを疑ってはならない。

このような疑問を持ちながらもお前は、イエズス会に入会した。

フロイスは、お前たちが皆イエズス会に入会したことについて次のように書いている。

> 秀吉が、少年たちを謁見したとき、伊東マンショと千々石ミゲルに「家臣にならぬか」と問いかけた時、私はひやりとしました。しかし、マンショが落ち着いて、「ありがたい話でありますが、このままでは今まで恩を受けた巡察師さまを裏切ることになり、忘恩のそしりをまぬかれません」と応え、秀吉もこの応えに満足してうなずいたのを見たとき正直、ほっとしたのです。
>
> しかし、司祭になるための勉学の道は厳しく、しかも、キリスト教の布教が危ぶまれている時に、必ずしも彼達の本心ではないように思えました。

彼達に入会を決心させたのは、『自分たちが日本の代表者として選ばれ、ヨーロッパの文明に接する栄光に属せたのは、ひとえに巡察師ヴァリニャーノ師のおかげである。帰国した今、その見聞を語らずに終われば、師に対する忘恩にほかならない。それは武士の面目を潰すことになる』と、考えたのではないでしょうか。

イエズス会への入会をミゲルが決める時、彼の母親がヴァリニャーノ師に母一人子一人を理由に、断念するように頼んだと聞いています。

お前たちはいずれも長崎のコレジオで学んでいたが、一六〇一年、マカオ留学の選抜が行われ、一七名が選ばれた。お前たちの中からは、マンショとジュリアンが選ばれたがお前は選から漏れた。

主な理由は、病身で手足が不自由のためだが、お前がイエズス会での出世は望めないと判断したのは無理もない。

しかし、この時点ではまだ棄教する心境にはなっていなかった。が、同じころ大村喜前――大村藩の当主、純忠の長男――がお前に面談を求めてきた。

雑談するように始まった面談で喜前は、大村藩の現状を語った。

検地の結果二万二千石とされている大村領の知行のうち喜前の直轄領は四千石に過ぎず、実際の財政は長崎の貿易が支えていたと言う。つまり、ポルトガル船一隻の停泊料が千クルサード、八千石にも相当するが、この長崎の権益が秀吉の直轄領とされ失われたのだった。

そのため、庶子や有力武士に与えている碌高の一部返還を求めるという、『御一門払い』を実施せざるを得ないが、家臣の多くはキリシタンなのでお前が説得役として適役だと喜前への仕官を求めたのだった。

さすがに、コレジオで不遇ではあるものの、この時すぐに仕官する気にはなれなかった。

なぜなら、お前は純忠がポルトガル貿易での利益を得るため、キリスト教に改心したこと及び、その絆をさらに強固にするためお前たちをヨーロッパに派遣し、お前たちを傀儡のごとく扱ったのではとの不快感を持っていたのだから当然だった。

しかし、喜前は順々とお前を説得した。

ある時、純忠に対する疑惑に気が付いた喜前は当時の様子をこう語った。

当時、大村藩には貴明なる嫡子がいたにもかかわらず、貴明は後藤家の養子となり純忠が有馬家から養子として入籍し大村藩の藩主となったのは、貴明の母が有馬出身でなかったためだが、このことが彼の生涯の重荷となり、藩内及び親族の離反を招く元になる。

さらに、この不平分子が、北九州一円に勢力を張る竜造寺と結びたびたび大村藩を脅かしていた。喜前も竜造寺の人質として、常に死と向かい合う生活を送り、解放されてからも蟄居させられていたという。

「このような情勢下で、大村藩を維持するに財政の改善を求めポルトガル貿易に手を染め、度重なる反乱にはポルトガルからの武器、や経済上の援助を受けて凌いできたのは事実だが、今まで大村藩が存

続できているのは、父純忠の現実感覚によるもので、その父を『似非キリシタン』として退けるのは、如何なものか」と語り、突然話を変えると、

「お前は、ほんとにキリスト教が広まれば、日本は平和になると思っているのか？」と訊ねた。

応えられずにいたお前に、「領主たるもの、自分の信念だけで行動するものではない。多くの家臣、民がいるのだ。父とて教義に信服していたが、イエスを唯一の絶対神とし他を異教として排斥するキリスト教の激しさについていけなかったのだと思う」

静かに語る喜前に、お前は初めて生身の人間としての共感を覚えたに違いない。

しかし、千々石静佐衛門と名乗り『御一門払い』に協力したお前は、大村藩内からは恨まれ、有馬藩に身を寄せたが、ここでは『ゆるまくずれ――イルマンをもじったもの――』、転び者とされ有馬にも住みつけず、一六二二年ごろ『ルセナ回想録』に、長崎に住んでいるとの噂の記録を最後に終わっている。

生前は、『転びもの』として皆に下げずまれたお前だが、ここに『島原の乱』――一六三七年――について、ローマにもたらされた信じがたい報告書がある。

『有馬のキリシタンは、殿から受けた暴虐に耐えかね一八歳の青年――天草四朗――を長に反乱を起こした。その青年は、かつてローマに来た四人の使者の一人ドン・ミゲルの息子であると言われている』

これは全くの誤報だが、この一種の貴種流離譚が語られているのは、お前が皆に愛されていた証だ。

お前の棄教について、ルセナ神父は『ミゲルは釈迦も阿弥陀仏も崇拝しないから、異教徒とは思わない。否、はなはだしい異端者か無神論者だ』

お前は、コレジオでの修練においても、キリスト教がもたらす天文・医学・建築といった学問には興味を持ったものの、来世などを信じられず、神の存在には否定的でついに信仰心は持てなかったのだ。

今にして思えば、お前にもこの使節団の真の企画者、パトロンが誰か理解できるだろう。ヴァリニャーノは信長を見てこの計画の実行を決心したのだ。

専制君子たらんとする信長は、比叡山延暦寺や石山本願寺などでの仏教徒の抵抗に手を焼かされたことから、天下を把握するためには政治の要に食い込み、自分たちの権益を守ろうとする佛徒と対決する必要があった。仏教の専制勢力を崩すために新しい宗教が広まり互いに勢力を争い、仏教の専制体制を揺るがすのは望ましかったのだ。

彼は、決して宗教としてキリスト教に触れようとはしなかったが、『四季はなぜあるのか？』『潮の満ち干はなぜ起こるのか？』などの質問に応える、神父たちのもたらす合理的な知識を愛していたのだ。

コペルニクスの地動説は一五四三年、ガリレオが生まれたのが一五六四年、まさにイタリアルネッサンス期さなかの円熟した芸術・科学などの文明の息吹を、信長は敏感に嗅ぎとったに違いない。

確かに、仏も神も信じない信長と、ヴァリニャーノの派遣の目的には大きな違いがある。

が、この企画は、あの群雄割拠の戦国時代、すでに世界に目を向け日本の絶対君子たらんとし、ヨーロッパ諸侯に好を通じ、文化交流を果たそうとした信長の壮大な夢だったのだ。

その『信長の夢』、それをお前たちは実現したのだ。

エヴォラ大聖堂のバラ窓から差し込む陽が、パイプオルガンを弾くお前をシルエットで照らし出している。あの天上の楽の音を思わせる重厚なレガートを、喜々として奏でるお前。

それが、お前の至福の時だったと誰が想像したであろうか。

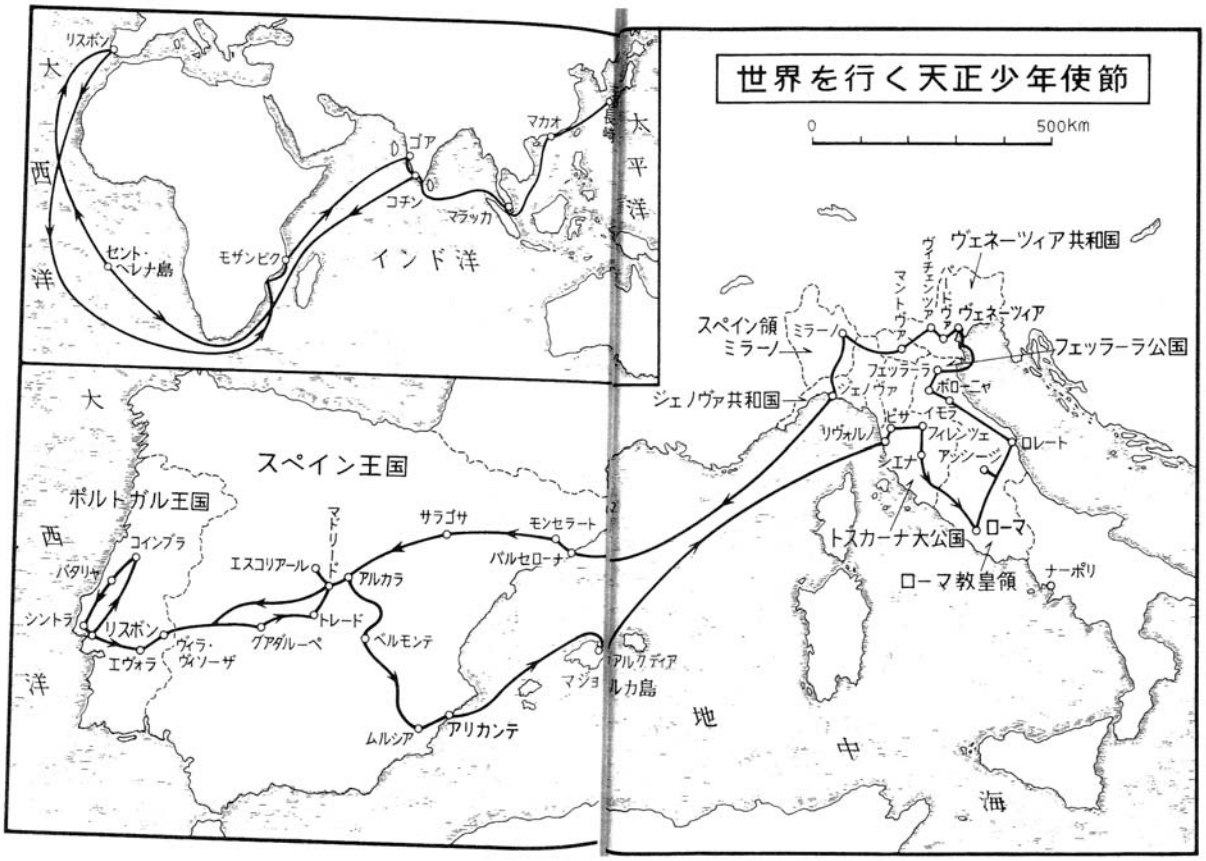
（参考文献）

＊『クワトロ・ラガッツィ』 若桑みどり　‘08 年

＊『大村純忠』　　外山幹夫

＊『大村純忠の謎　没後 400 年記念シンポジューム』

＊『天正少年使節団』　　松田毅一

＊『イエズス会の世界戦略』 高橋裕史

少年使節団のたどった道